

# 学士課程における助産学教育の現状と課題

三井政子, 岡本喜代子\*

The Present Status and Problems of Midwifery Education  
at the Undergraduate Level

Masako MITSUI, Kiyoko OKAMOTO\*

**ABSTRACT:** Nursing education is increasingly included within traditional college education, but there is as yet no consensus as to how midwifery education should be incorporated within the present system of nursing education.

In order to understand the present state of midwifery education and gain perspectives on its future, a survey was carried out among students taking midwifery courses as well as instructors teaching such courses at 3 colleges providing midwifery education as an elective subject (St. Luke's College of Nursing, Chiba University and Ryuky University). A questionnaire was mailed to individual subjects and subsequently collected.

A total of 14 students took midwifery courses in the relevant year, and 12 responded to the questionnaire. Of students applying to take these courses, 20% were accepted.

The most frequent motive for taking the courses was "to obtain qualification" followed by "interested in midwifery" and "learn more about nursing."

As for the necessary effort involved, more than half the respondents answered that they could "do it with much difficulty."

We hoped to re-evaluate the manner in which midwifery education is provided on the basis of these survey results.

**Key words:** Midwifery education, Undergraduate, Nursing education.

## はじめに

現在, 医療の高度化, 専門化が進む中で人間性と科学性を重視した助産学教育をいかにすべ

京都大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻  
\* 大阪府立助産婦学院  
Special Division of the Science of Midwifery,  
College of Medical Technology, Kyoto University.  
\* Osaka Prefectural Midwifery School.

1990年9月4日受付

きかについて審議・検討が重ねられている。昭和59年の日本看護協会総会で看護制度改正の協議があり, 「4年の学士課程卒業生を看護師(仮称)とし, 卒後3カ月程度の現任教育で, 現状の看護婦・助産婦・保健婦の業務ができる」という提案がされた。一方, 全国助産婦教育協議会では, 「学士課程の4年間は看護基礎教育とする。助産婦教育は専門領域の教育として, 4年卒後に1年間専攻課程で教育する」ことを提

言して、文部省に制度化を要望している。つまり看護協会は4年間の学士課程の中に助産婦教育を含める意向があり、全国助産婦教育協議会は含めない教育を考えている。看護婦教育の一部は漸次大学化されつつあるが、助産婦教育の位置づけについては未だ看護教育者の中でコンセンサスが得られているとはいえない。

平成元年度現在、日本において学士課程の中で助産学教育をしているのは、聖路加看護大学、千葉大学看護学部および琉球大学医学部保健学科の3大学のみである。

そこで今回、大学における助産学教育の実態を把握し、助産学教育を位置づけることを目的として、上記3大学の助産関係科目を履修した学生と助産学担当教官を対象にアンケート調査を実施した。

### 研究 方 法

研究方法：1989年2月15日から3月5日の間に履修学生用および担当教官用アンケートを担当教官宛に郵送により依頼、回収した。アンケート内容は、学生に対しては選択動機、履修上の問題、履修後の感想、助産学教育制度に対する意見等が含まれ、また、担当教官に対するものは、履修学生数、履修学生の背景を調査するための履修単位数および年間スケジュール等である（別紙資料参照）。

### 調 査 結 果

調査結果：回答数は、対象学生総数14名の内12名であり、大学別は表に示す通りである。

#### 1) 教官アンケート

各大学に共通して助産学履修は、選択付加科目に位置づけられている。ここでいう付加科目とは、助産学を選択する学生は一般学生が履修する以上に助産学の単位を余分に選択履修しなければならないという意味である。付加単位数は表1に示すように大学により異なり、8単位～16単位と大きな差がある。

助産学課程として選択するA大学と教科目選択であるB、C大学とでは運営にも違いが認められた。実習指導教官数はA大学では7名であったが、B大学は4名、C大学は2名の教官で教育がなされていた。

保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則という助産学課程の時間は講義360時間、実習360時間で修学期間は6カ月以上である。A大学は指定時間と同じ時間が計画され、B、C大学は看護基礎教育科目の中で内容を増幅付加し、指定時間の内容の読み替えを行っていると思われる時間数であった。他の教科時間内に読み替えられた時間は主に3年次に履修している。教科目履修を4年次に記入していたのはA大学のみで他は回答されていない。

このような教育体制の中で、助産学の選択を

表1 履修すべき助産関係科目とその単位数

	A 大 学		B 大 学		C 大 学	
	科 目 名	単位数	科 目 名	単位数	科 目 名	単位数
講 義	母子保健医学	3	母子保健医学	1(30H)	周産期保健医学	2(60H)
	助産論	7	助産論 I	2(60H)	周産期看護方法	2(60H)
	母子保健管理	3	助産業務管理	1(30H)	助産論	2(30H)
	助産業務管理	2			助産業務管理	1(15H)
	家族関係論	1				
実 習	講義単位に含む		助産論 II	4 (180H)	助産論実習	4 (180H)
計	16単位 (720H)		8単位 (300H)		10単位 (345H)	

表2 選択学生の背景

学生数等	学校別	A 大学	B 大学	C 大学
1 学年の学生定員		60	85	50
助産課程選択学生定員数		14	15	17
選択学生希望者数		18	15	17
選択学生数		4	6	4
選択学生の決定方法		1. 3年次迄の科目 単位取得状況 2. 3年次迄の成績 3. 母性看護学の成績 4. 学習の状況	成績と健康状態に より総合判断	学生同士の話し合 いにより選択者を 決定

希望する学生は、表2の如く大学により異なるが、A大学の例では学生数の18~34%が選択を希望していた。助産選択定員はA大学では希望学生の23%、B、C大学では20.0%であり、少数の学生のみが助産教育を履修できる。

履修学生の決定は、A、B大学では希望学生の4年次までの成績や健康・学習状況をもとに大学側で選抜していた。4年の間に保健婦、助産婦、看護婦の3職種(保健婦と看護婦は必修)の学習をした上で、3つの国家試験に合格するためには、学生の能力および適性が抜群でなければならず、慎重に選抜する必要があるというのが大学側の見解である。一方、C大学は希望学生の間で自主的に選択者を決定する等の方法がとられていた。

実習は表3のように実施されていた。実習時間は3大学とも指定規則による時間以上を大学規定時間としていた。実施実習時間はA大学が470時間、B大学420時間、C大学が430時間である。各大学共に夜間実習を行うための宿泊施設が用意されていた。実習時期は、A大学では4年次の夏季休暇を返上して7月から10月に、B大学は4年次学年末の1月~2月に集中して、C大学は8月と2月~3月の2期間に実施している現状であった。

## 2. 学生アンケート

学生の助産関係科目の選択動機は、「資格が取りたい」が6名で、次に「関心がある」が5名であり、「看護を広く学びたい」が3名であった(重複回答)。実習到達度については、各

表3 助産実習状況

項目	学校別	A 大学	B 大学	C 大学
実習指導教官数		7名	4名	2名
実習施設数		1施設	1施設	2施設
分娩数		1,000例	1,800例	1,000例
規定実習時間		360H	4単位(180H)	4単位(180H)
実施実習時間		470H	420H	430H
夜間実習		有り	有り	無し (ケースにより有り)
宿泊施設		有り	有り	有り
夜間実習期間		7月~10月(70日間)	1月~2月(35日間)	8月・2月~3月

々の学生の認識で内容ないしレベルを査定していないが、「どうにか出来る」というレベルでしかないという回答が大半を占めていた。

学生が履修上問題として列挙した項目の1位に3点、2位に2点、3位に1点を加えてその問題を整理すると、第1位は「卒業論文との並行がハードである」が5.7点であり、「他教科との平行がハードである」とするのが2位で3.7点、次に「拘束時間が長い」が3.3点、「課題が多い」が2.7点の順であった(重複回答)。

実習中の学生の睡眠時間は、A大学が5.0時間、C大学が5.9時間、B大学が7.0時間であった。この睡眠時間は、実施実習時間が多い学校順に睡眠が少ないという傾向がみられた。実習中の健康状態は8人が「問題なし」、4人が「健康上の理由で欠席した」と回答していた。欠席した4人の内3人が受診しており、自由記載に「表面的には健康でも、睡眠不足・精神面で不健康」との記述があった。

履修後の感想は「非常によかった」が8名、残りは「まあまあよかった」と全ての学生がよい評価をしていた。

学士課程における助産学の教育について望ましい教育形態としては、「現状のまま、4年次の選択制でよい」とする学生が1名で、「大学での看護基礎教育終了後、1年間の大学特別専攻課程で行う」が9名あり、その他2名が「選択制で、3年次または卒業論文前に助産婦関係科目の履修が終了するよう計画する」等現行の問題を改善する方向での回答をしていた。その理由としては、「現在の選択制による教育が過密すぎる」を7名があげていた。また「大学院での教育が望ましいが、マンパワーの供給が極端に少なくなるという観点から、1年間の大学卒業後教育で、特別専攻がよい」という意見や、「国家試験や就職に不利にならないよう何等かの形で変更して欲しい」等の意見があった。

履修者の卒業後の就業は、9名が助産婦、2名が他分野、1名が進学を希望し、75%が助産婦職種に就職するとしていた。

### 考 察

急速に発展する科学の進歩と生殖を基点にした母子保健問題の多様化による助産婦の基礎教

表4 4年制大学における助産教育

内 容	A 大 学			B 大 学			C 大 学		
	一般教養	専 門	選択助産 (再 掲)	一般教養	専 門	選択助産 (再 掲)	一般教養	専 門	選択助産 (再 掲)
開 講 単 位	1年次	40	22		4		52	1	
	2年次	22	32		18		36	72	
	3年次	19	25		52		79	16	
	4年次	10	54	16	33	8	55	以上	10
	計	91	133(16)		48	107(8)		52	171(10)
卒業要件	56      76 132			48      94 142			52      88 140		
備 考	• 教職課程17単位			高校2級教員免許14 (うち教育学部8)			• 看護コースは一般教育52単位 中11単位は専門教科によみか えることができる		
助産課程 選択者数	定員60人中14人が選択できる			定員80人中 大体5人が選択している			看護コースの20~25人中5人が 選択している		

(注) 単位数は1985年度各大学の履修ガイダンスによるものである。

育の過密スケジュールを教師・学生共に問題視し、ゆとりある教育を願望している報告が多い<sup>12)</sup>。平成2年4月より保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則が一部改正されて実施された。改正によって教育内容の見直しはされたが、教育期間は現行通りの6カ月である。

今回の調査はこれまでの指定規則による表4のカリキュラムを履修した学生に対するものであるが<sup>3)</sup>、履修学生の背景や履修状況・学習到達度及び学生の反応等から、学士課程における選択履修の実態の一端を把握できた。改めて履修上のハードさや学生が関心あるいは興味を持って少数の学生しか履修できない定員制限等、生の声や具体的な実状を知ることができた。

今回の調査により助産学のコアとなる専門領域は、看護の基礎領域の大半を終了した4年次に履修していることが分かった。履修する時期が卒業前の就職試験、卒業論文または国家試験受験時期等と重なる時期であり、さらに、他科目との並行学習を行いながら短期間で履修するなど、履修学生は非常に過密な学習をしていた。この過密さが履修者の学習上の問題の根元となり、ハード感や睡眠不足を来して精神的にも不健康感を持つに至っている。この過密カリキュラムは、大学教育の大きな意義である自主性を尊重し、創造性を育み、豊かな人間性をもつ人格の陶冶をめざす本来の狙いを阻害すると思われる。

一方、大学教育の場における助産婦教育は、基礎的能力を活かし、精深に専門的な知識や能力を深め、教育者、研究者、指導者として成長する助産婦の基礎教育として期待が大きい。卒業生は、例えば社会の変化に対応出来るような助産モデルや実践の理論化に関する研究・開発能力、後輩の指導ができる教育能力などを発揮すると考えられる。しかし、現状のような短期間に凝縮した教育では、優秀な学生にとっても、獲得できる内容には限度がある。彼女達の育成のためにもこの過密なカリキュラムについては現在、科学で検討する必要があると思われる。改善の方向技術の進展と高等教育の高まりの中

で、看護婦教育を行う医療短大は全国に70余校、その医療短大の1/3に助産学専攻課程が設備されているが、教育者の人材不足は無視できない。看護婦教育が学士課程に昇格するとき、学士以上の課程での助産学履修者は必要不可欠な存在でもある。

日本の数少ない看護大学での助産学履修者は将来の教育者、研究者、指導者の人的資源である。この需給の視点から見て現状の大学教育における助産学教育には問題がある。現実に志願者は多いのに、その殆んどの学生が履修できない状況は早急に改善されねばならない。昭和62年から北里大学と日本赤十字看護大学の2大学が開学したが両大学とも既設大学と同様の状況のもとに助産学教育が行われている。能力があり関心を持つ学生に、学ぶ機会を提供できる教育体制を、大学卒業生がこれから果たす役割を想定しながら検討することが急務である。

大学に在職する教育者は、研究と人材育成を一体的に推進する使命を持ち、両者の総合的な推進が不可欠とされているが<sup>4)</sup>、この過密カリキュラムと人員不足の状態では、大学教官自身がその機能を果し得ない。

アメリカでは、学士課程はその分野の基礎知識を学び、専門の責任ある実践者や研究者の教育は修士課程で履修するとの考え方である。アメリカの大学における助産学教育は1947年に開始され、1955年にコロンビア大学、1956年にはジョンズ・ホプキンス大学とエール大学の各大学院に助産看護の専攻課程が設置された経緯がある。それ以後、社会の高学歴化の中で助産学教育は漸次修士課程に移行しつつある<sup>5)</sup>。その入学には2年以上の看護婦経験（うち1年は母子関係）を必要条件としている。1989年現在、看護助産婦になるための学校は全米で25校あり、そのうち博士課程は1校、修士課程は16校ある。彼女達は着実な基礎能力を獲得して卒業し、生き生きと自信をもって看護助産婦として機能し、社会の期待に応えている。

イギリスにおける看護教育は、衆知のとおり実践を重んじ、かつ、最初からダイレクトに領

域別の専門教育がなされている。1965年に開校されているオックスフォード・ポリテクニック総合大学では、1989年9月から4年制助産学専攻学士課程が看護・助産・訪問看護学部で開講されている<sup>5)</sup>。ここでは18カ月の基礎課程の後、各々の専攻分野の課程へ進む。英国の助産婦活動は各国の評価も高い。この米英の学士課程以上での助産学コースのカリキュラムは、専門家としての確かな知識と技術を獲得させる教育制度としており、世界の関心をおつめている。

我国においては昭和62年に「大学等における教育研究の高度化・個性化及び具体的方策について」のテーマが検討され、答申が出されている<sup>7)</sup>。その答申は、「大学院の役割に鑑み、その使命を自覚し、それぞれの目的に即し、多様な形で教育研究のより一層の高度化・活性化を推進すると共に、生涯学習の場として機能させていく」と提言し、「運用にあたっては社会人の再教育需要に適切に応じられる履修形態や教育方法の弾力化を推奨し、近年の急激な社会の変化や学術・研究・技術の高度化に対応していける人材の育成が必要である」としている。教育制度の見直し、弾力化に伴い、大学修士課程の短縮等の提言もなされている。

今回の調査で履修学生の意見にもあったように、看護基礎課程修了時の学習到達度、需給関係から、専任の教官を配置した一年以上の課程等の専攻課程設置が社会要請にも適合すると考える。

高等教育検討において、その課程を助産学専攻の専攻科とするか修士課程にするかについては種々議論があろう。しかし現状の4年学士課程における助産学の履修は改善しなければならない。

## ま と め

1989年度現在、学士課程で助産学を履修できる大学は全国に3大学（千葉、琉球、聖路加大学）である。これらの大学の助産婦教官と履修学生全員にアンケート調査を行った。3大学の履修学生総数14名のうち12名からアンケート回

答があった。

1. 各大学の教官数はA大学8名、B大学5名、C大学2名であった。
2. 3大学の履修単位は、8単位から16単位まであり、大幅に異っていた。
3. 助産婦課程の科目は3大学ともに保健婦、看護婦課程のほか、別個に履修するいわゆる付加科目になっている。A大学は助産婦課程としてまとめられた科目を履修し、B、C大学では学生が助産関係の科目を別個に選択履修する科目選択方式をとっていた。
4. 学生は学習終了時の到達度を「どうにかできる」のレベルに評価していた。
5. 履修の希望者は多いにも拘らず、各大学の助産学課程の定員は少数で、希望者の約20%程度の学生だけが履修が可能という状態であった。
6. カリキュラムが必然的に過密になるため、学生の履修中の健康状態に問題があり、1/3の学生が、睡眠不足、精神面での不健康感を訴えていた。

現在の4年生大学助産婦教育の最大の問題点は、看護婦・保健婦・助産婦の全ての過程を4年間の教育期間中に組みこんでいることである。このため、助産関係科目を選択した学生は非選択の学生よりも過密なカリキュラム履修を強いられ、教育上の様々な問題をもたらしている。さらに、助産学の教育理念から見ても十分教育が行われているとは言い難い。これらの問題を解決するには、助産学教育を4年生の枠からはずして修士課程あるいは専攻科課程に分離するのが理想的であろう。

## 文 献

- 1) 三井政子, 菅沼美奈子, 田中恵子他: 学生の適応からみた助産学教育の検討. 日本助産学会誌 1988; 2: 54-59
- 2) 小木曾みよ子, 中島知我子, 佐々木敦子他: 助産婦教育の現状と問題点. 看護教育 1986; 27: 91-94
- 3) 三井政子, 佐々木敦子, 小木曾みよ子他: 看護基礎教育が4年制大学に昇格したときの助産学の位

三井政子, 他: 学士課程における助産婦教育

- 置づけ、看護教育 1986 ; 27 : 835-839
- 4) 川村恒明: 日本の学術体制を問う一わが国の学術行政システムと動向. 現代の高等教育 1990 ; 314 : 11-19
- 5) Sharp, ES: "Nurse-Midwifery Education" Its Successes, Failures and Future : Journal of Nurse-Midwifery 1983 ; 28(2) : 17-23
- 6) 高橋裕美: オックスフォード・ポリテクニク助産学専攻課程の概要. 助産婦雑誌 1990 ; 44 : 294-299
- 7) 文部省高等教育局大学課法令研究会: 大学院制度の弾力化について (答申). 大学関係事務提要 1988 : 2299-2~15

〔資料〕

大学における助産婦教育に関する調査協力をお願い

この調査は、大学における助産婦教育（以下、助産課程と呼ばせていただきます。）の現状を把握し、これからの助産婦教育のあり方を考える一助にすることを目的としております。なにとぞ、よろしくご協力の程お願いいたします。

○調査用紙 1 ……助産課程の教官の方に回答お願いいたします。

○調査用紙 2 ……1988年度（4年生時）に助産課程を選択した学生全員に回答お願いいたします。

なお、この調査の結果については、学校および学生の皆様の秘密を厳守し、ご迷惑をおかけしたり、名誉を傷つけるようなことは一切いたしません。調査の主旨をご理解の上、ご協力いただきますよう重ねてお願い申し上げます。わかりにくい点がございましたら下記までご連絡下さい。

ご多忙中、恐れ入りますが3月15日（水）までに、同封の封筒にて、三井までご返送下さい。（学生の方は、助産課程担当の教官にお渡し下さい。）

平成元年2月15日

調査用紙 1

〔助産課程の教官の方に回答お願いいたします〕

学校名 [ ]

( ) またはワク内にご記入ください。

1. 一学年の看護学部（科）の学生定数：( )名
2. 助産課程選択学生定員数：( )名
3. 1988年度に助産課程の選択を希望した学生数：( )名
4. 実際に1988年度に助産学を選択した学生数：( )
5. 希望学生数が定員数より多い場合はどのように選択学生を決定しておられますか。

( )

6. 看護学部（科）の総科目数と卒業に要する単位数・時間数（いずれも合計数をお書き下さい。）

全学年の総科目数 ( ) 科目

	講 義	実 習
必修	( ) 科目	( ) 科目
	( ) 単位	( ) 単位
	( ) 時間	( ) 時間
選択	( ) 科目	( ) 科目
	( ) 単位	( ) 単位
	( ) 時間	( ) 時間

7. 助産課程を選択しない学生が4年生時に履修すべき科目数と単位数・時間数（いずれも合計数をお書き下さい。）

	講 義	実 習
必修	( ) 科目	( ) 科目
	( ) 単位	( ) 単位
	( ) 時間	( ) 時間
選択	( ) 科目	( ) 科目
	( ) 単位	( ) 単位
	( ) 時間	( ) 時間



8. 助産課程を選択する学生が履修すべき科目数とその単位数・時間数

	科目名	単位数	時間数
講 義			
実 習			
合計	(合計科目数)		

9. 助産課程を選択する学生の臨床実習状況

1) 臨床実習施設数および年間分娩数（複数施設の場合は合計の分娩数）

① 施設数（ ）

② 分娩数（ ）

2) 実習時間について

① 規定：（ ）単位（ ）時間

② 実際の実習に要した時間：平均（ ）時間

③ 実習指導にあたる教員数：（ ）名

3) 夜間実習について（①②は該当するものを○でかこんでください。）

① 夜間実習の有無：有り 無し

② 有りの場合は宿泊施設の有無：有り 無し

③ 夜間実習の期間：開始（ ）月から終了（ ）月まで（ ）日間

4) 継続事例について

① 学生一人あたりの例数：（ ）例

② 継続事例の受持ち時間：（ ）から（ ）まで

10. その他（何でもお気付きのことを自由にお書きください。）

( )

ご協力ありがとうございました。



三井政子, 他: 学士課程における助産婦教育

内 容	履 修 レ ベ ル
・日常な分娩経過をとる産婦の経過を正しく把握し診断できる。	
・正常分娩介助ができる	
・異常の予測と対応ができる	
・救急処置ができる	
・出生直後の新生児の取り扱い, 健康診査ができる	
・分娩室, 陣痛室の整備, 管理ができる	
・助産施設の助産業務を計画, 実施, 評価できる	
・助産業務を計画, 実施, 問題について分析できる	
・評価した問題を改善し記述することができる	
・自己啓発, 研究, 教育等の人的管理について理解できる	
・褥婦について理解し, 健康診査と保健指導ができる	
・新生児の成長・発達のアセスメントができ健康診査, 保健指導ができる	
・育児の原則を理解し, 個別指導ができる	
・地域母子保健の評価ができ, その改善のための法の活用地域母子保健システムの改良のための提言ができる	
・地域母子保健を推進できる姿勢を身につける	
・地域母子保健を具体的に実践できる	

7. 大学における助産課程の教育についてお答え下さい。

1) 次のうち, どの形態が一番望ましいと考えますか。

イ. 現状のまま, 4年生時の選択制でよい。

ロ. 大学での看護基礎教育修了後, 1年間の大学別専攻課程で行う。

ハ. 大学での看護基礎教育修了後, 2年間の大学院課程で行う。

ニ. その他 ( )

2) それはなぜですか。

イ. 選択制の教育では過密すぎるから。

ロ. 大学院過程で行うべき教育内容であるから。

ハ. 大学院での教育が望ましいが, マンパワーの供給が極端に少なくなるという観点から, 1年間の大学特別専攻課程が良いと考える。

ニ. その他

( )

